

■ 書 評 ■

帰してはいけない小児外来患者

崎山 弘, 本田 雅敬 ● 編

長谷川 行洋, 広部 誠一, 三浦 大 ● 編集協力

筑波大学附属病院教授・総合診療科 前野 哲博

小児診療について、全国全ての地域・時間帯を小児科医だけでカバーすることは不可能であり、実際には救急医や総合診療医などの「非小児科医」が小児診療に携わる機会が多い。特に総合診療医には「地域を診る医師」としてあらゆる年代層の診療をカバーすることが期待されており、実際、2017年度から新設される総合診療専門医の研修プログラムにおいても、小児科は内科、救急科とともに必修の研修科目として位置付けられている。

このような小児診療に関わる非小児科医にとって、最低限果たさなければいけない役割は何だろうか？さまざまな意見があるかもしれないが、最終的には「帰してはいけない患者を帰さない」ことに尽きるのではないだろうか。たとえ自分ひとりで診断を確定したり、治療を完結したりできなくても、「何かおかしい」と認識できれば、すぐに小児科専門医に相談して適切な診療につなぐことができるからだ。

このたび、そんな非小児科医にとっても最適の本が発刊された。タ

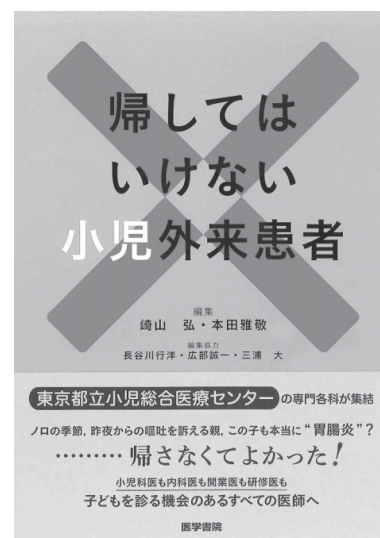
イトルはズバリ『帰してはいけない小児外来患者』である。

本書は第1章の総論と第2章のケースブックから構成されている。

第1章では、筆者の豊富な診療経験と、臨床推論の理論的背景をもとに、一見軽症に見える「死の合図に該当」する疾患をうっかり見逃してしまうプロセス（＝見逃さないためのポイント）が症例や図を交えてわかりやすく述べられている。その内容は小児診療のみならず、全ての診療に通じるものであり、ぜひ一読をお勧めしたい。

第2章はケースブックである。ここに提示されている40の症例は、ほとんどはありふれた訴えから始まる。ケースの紹介に続いて、外来担当医の考えた鑑別診断やそれに至る思考回路が示される。その一連のプロセス中で、危険な疾患が潜んでいることに気付いたポイントが「転機」として示され、さらに「教訓」としてその解説、そして「最終診断」「TIPS」の順に記載されている。

ちなみに、同じ医学書院からは



2012年に、主に成人患者を対象とした『帰してはいけない外来患者』が発刊されている。私もその編集にかかわったが、両書とも症例の経過と医師の思考回路を通して危険な疾患を見逃さないためのポイントを解説するコンセプトは同じである。読者は、思わず見逃しそうになった経緯から、どんでん返し！で最終診断がつく経過まで、臨場感をもって学ぶことができるため、非常に興味深く、また記憶に残りやすい構成になっている。

一般的な教科書では、知識を学ぶことはできても、経験豊富な小児科医の「頭の中」、つまり思考プロセスを学ぶことは難しい。それを追体験できる本書は、小児科研修中の医師はもちろん、小児診療にかかわる全ての人にお勧めの一冊である。

A5・頁224 2015年04月

定価：本体3,600円＋税

[ISBN978-4-260-02138-8]

医学書院刊